



## 2 五十嵐愛子という女の子

日誌（原本）の10月28日の書き始めは「晴れ 朝の常 マタイ十三章 天国の聖話」です。音次郎は曜日と共に天気を1行目に書きだします。2行目はほぼ、朝の祈り、聖書の黙想が手短かに記されています。それを後年では「朝の常」と略記するようになっていきます。この日、音次郎が読んだ聖書は新約聖書のマタイの福音書13章という箇所です。ここには主イエス・キリストが、農夫が畑に種を蒔く動作から例え話を始めて、その種がやがて生長して天の恵みを思い描かせる内容です。音次郎は朝、この場所を読んで「天国の聖なるお話だった」と、簡潔に感想を述べているのです。

その上で、一昨日26日に五十嵐愛子の母が東京に居る事を突き止められた件に関して、アクションを起こさなければとの動機付けがなされたようで、愛子にまず、この事実を告げる電報を打ちます。そして、大分県杵築町の情報提供者にも御礼の電文を送っています。その人は河合精一郎だとも書かれています。

## 3 母を訪ねて300里

むかしのアニメ劇場のタイトルのようなのですが、五十嵐愛子の母を訪ねた距離感を考えてみました。東京日本橋を起点として現在の県杵築市（現在は町から市になっているようです）の市役所までをルート検索すると1130km程度です。100年前には高速道路も山や谷を越えてトンネルや橋も少なかった事を思えばもっと遠かったと思いますが、仮に1里3.9kmとして割り算すると300里となります。アルゼンチンのマルコ少年の物語の10分の1の距離ですが、充分遠い隔たりです。

日誌（活字版）では、次に愛子の記事が登場するのは11月19日で、途中経過が飛んでいます。そこで、この時期の手紙を探していると、11月3日に音次郎が次女・伸の夫・昇に宛てた手紙が存在していました。それに拠れば、愛子はこの時、昇夫妻と共に旅順支部に、何らかの原因で滞在している事が判ります。この手紙の冒頭はこうです、

**去る廿八日（28日）の夕方突然ながら愛子さん宛にて「ハハノトコロ、シレタ、イサイフミ」サタケと電報を差上て其まゝ手紙を差上ませぬ故、何んの事だト御不審なされて居られる事と存じます。**

史料の記録が相関関係で一致しており、お互いの史料が当時の情報を補い合ってくれます。余談になりますが、これが歴史研究の「おもしろみ」と言えるでしょう。

そして、日誌だけでは理解できなかった大分県杵築町の河合精一郎という人物は誰なのかが、この手紙で明らかになります。

**実は其日二、大分縣の杵築町という所の町長（河合精一郎氏）より愛子さんの事に付きて御手紙参り 其御手紙に愛子さんの母様より御手紙が来た様に書いて有りましたから 其町長さんに聞けば直ぐ判明するものト存じて 一日も早く愛子さんを喜ばせようト考へたもの故 取敢ず電報差上げました**

何と、河合という人物は町長だったので。これは、ここまでを私が読んでの推測になるのですが、愛子の母が大分県出身である事は音次郎が予め知っていて、行方不明になった五十嵐のお母さんを出身地に問い合わせて探し出そうとしたものだと考えられるでしょう。

#### 4 音次郎の人脈

この大分県の町長からの吉報ですが、大分県は津田儼（津田仙）の故郷です。津田儼は音次郎をキリスト教に導いた、いわば音次郎の師匠です。また書画の寄付に応じた人物にも元田肇（第25代衆議院議長、逓信大臣、初代鉄道大臣）、箕浦勝人（新聞記者、衆議院議員、逓信大臣）などの大分県出身者が登場します。音次郎は愛子の願いを叶える為に八方手を尽くしただろう事が覗えます。

会報25号では、慈善書画会に参画した陣容を詳しく分析した結果を掲載しましたが、その中で都道府県別にも見ております。大分県出身者は9人いました（解読できていない人名の中から増える可能性があります）。音次郎は事業資金捻出の為に奔走しますが、そんな中でも、本来、真っ先に取り組むべき養育の事に関して、この人脈もチャンスと捉えて、ある時はその人脈を通して今回のような尋ね人もおこなっていた事が推測できます。

#### 5 母は、今……

11月19日の日誌を詳しく読んでいますと、①母子の対面は10年ぶりである事、②音次郎は10年前に愛子の母とは、実は、会っていた事、しかし、③愛子にとっては母に会えるのは生まれて初めてである事、などが判ってきます。

そして、音次郎が愛子の母に対して「更生」との言葉を用いている事から、愛子の母は女囚であったのではないかと推測されます。つまり板垣退助が政界を退いて後、夫人を中心に活動していた女囚の要保護児童支援活動を、音次郎が引き受けていた「その1つのケース」であった可能性が高いのです。「母子初めての対面」という記述から、愛子の母は獄中で出産したのではないかとさえ推察ができます。日記ではこう綴られていました。

此人 寔(まこと)に更生の境涯に在るを見て感謝の情動く事 頻(しき)り奈(な)り。来春 昇兄來援の際 愛姉を伴ひ来りて生来初めての母子対面(たいめん) 叶はゞ 誠に幸なりと思ふ。

音次郎はこの母子初対面の調和をはかったのです。

#### 6 板垣退助との繋がり

史料読解学習会③（2023年6月実施）で、音次郎と板垣退助の繋がりを学んだ時に、日誌（活字版）で「板垣退助」と読まれていた部分は、実は読み間違いである事がこの時に発見されました。音次郎と板垣との繋がりは確実ですので「この1点においては悲観するものではなく、むしろ歓迎。歴史研究というものは進めば進むほど新たな発見があるものだから」との総括をしておりました。

その、一見空振りに思われた板垣退助との繋がりが、今回、ここでまた見えてきました。これからも読み解き学習会を重ねるごとに、様々な発見ができる希望が見えた第5回学習会でした。

そして、音次郎が事務的に奔走している中でも、実の子を思うように預かった1人1人の子供の最善を尽くそうとしていた事も見えました。愛子が実の母を恋い慕う思いを叶えようと、音次郎は自分ができる事をしました。これが「保育の父」なのです。